

日常的な親子スポーツ体験の実施状況に関する調査研究

研究者：彦次 佳(保健体育教室)、則定 百合子(心理学教育教室)

連携先：矢出 大介(和歌山大学教育学部附属小学校)

1. はじめに

親と子のキャッチボールは、科学的な根拠は見つけにくいものの、「遊戯を超えて有効なコミュニケーションの手段」(青島, 2004)となり、「子どもにとっての安心」(青島, 2004)を産むということは、想像に難くない。親と子のキャッチボールのように、しばしばスポーツを始めるきっかけとなる“親子でスポーツを楽しむ体験”(以下、親子スポーツ体験)は、子どもにとってのスポーツの出会いや入り口となり得るだけでなく、まさにコミュニケーションを深め、安心や信頼を互いに与える体験やツールとなるのではなかろうか。

このようなリサーチクエストを持ち、昨年度、2018 年度和歌山大学教育学部連携事業において、マスターズ甲子園 2018 大会での「甲子園キャッチボール【親子編】」プログラムに参加した親子ペアを対象に調査を実施し、親への信頼感と心理的居場所感に与える効果について分析を行なった。その結果、親子でスポーツを実施することは、親への信頼感を高めることに繋がり、「親から頼りにされる」・「自分にできることがある」(役割感)、「親と一緒に居ると自分らしく居られる」・「安心する」(素直感)といったような心理的居場所感を高めることに繋がることになった。特に、信頼感と心理的居場所感の双方を高めるには、ただ単に回数をたくさん行なうのではなく、ゆっくり、じっくりと時間をかけて親子でスポーツをすることが効果的であることがわかり、“スポーツ”体験を介しても親子で一緒に過ごす時間を長く持つことの大切さがうかがえる結果となった(彦次・則定・矢出, 2019)。

昨年度事業において、親子スポーツ体験と信頼感、心理的居場所感との関係を捉えるにあたり、マスターズ甲子園 2018 大会で調査を実施したことは、当該事業研究での一定のサンプル数を確保し、より良い成果を見出すという観点からは、結果として非常に良い手続きとなった。しかしながらそのシチュエーションをふりかえると、「聖地・甲子園球場で」親子でキャッチボールを楽しむという稀有なイベント的体験であることは言うまでもなく、活動の内容よりも活動場所が強い影響を与えたことも考えられる。そこで、今年度事業においては、日常的な親子スポーツ体験の実施状況や実施希望などの現状を捉え、それらの効果について検討を行なうべく、本事業を進めることとした。よって本研究の目的は、小学校高学年を対象として、日常的な親子スポーツ体験の実施状況および実施希望について基礎的な資料・情報を得ることとする。

2. 研究方法

＜調査項目＞

日常的な親子スポーツ体験の実施状況(実施頻度および実施時間)、実施希望(実施意欲と期待感)について調査票を作成した。昨年度の当該事業で実施した親子の信頼感尺度 8 項目(酒井, 2005)や心理的居場所感 20 項目(則定, 2008)についても、同調査票に掲載し回答を求めたが、本報告の時点ではサンプル数に不足があり、結果を示すに至らない。なお、個人的属性については、可能な限り回答に対するストレスを軽減するため、学年と性別のみとした。

＜調査方法＞

調査の実施に当たり、まず最初に、本事業で得た予算により、研究代表者および連携先共同研究者が共に活動しているスポーツイベント(片男波ビーチアルティメット: http://www.sportslifepromotion.com/kataonami_bu/)に合わせてフライングディスクを購入し共同研究者に配布、学級内でフライングディスクを用いたキャッチ&スロー(キャッチボールのようなもの)を紹介、親子でキャッチ&スローを楽しむことや、上記イベントへの親子での参加などを促した。また、その後も継続的に共同研究者が学級内でフライングディスクを用いたアルティメット競技や楽しみ方を

紹介、フライングディスクを用いた全ての競技や遊び方のベースとなるキャッチ&スローを定着させた。最終的に、当該事業年度の終盤となる3学期に、先述した調査票を共同研究者が配布、その場で記入・回収を行なった。回収数は24、そのうち男子生徒11名、女子生徒12名、不明1名となった。

3. 結果と考察

1) 親子スポーツ体験の実施状況および実施希望

親子スポーツ体験の実施状況および実施希望について、単純集計をとったところ、図1の結果を得た。日常的な親との運動・スポーツ実施頻度としては、月に1~2回程度が45.8%と約半数にのぼり、ときどき(週に1~2回)実施している子どもたちが約3割(29.2%)、1割程度(8.3%)の子どもたちはほとんど毎日、親子で運動・スポーツを実施していることがわかった。また、実施時間については、30分未満と30分~1時間未満でおよそ3割(58.3%)、1時間以上実施している親子が2割以上(20.8%)居ることがわかった。そして、親との運動・スポーツ実施希望については「とてもしたい」が半数にのぼり、「少ししたい」と合わせると7割を超える子どもたちが、親との運動・スポーツ実施を願っていることがわかった。しかし一方で、「全くしたくない」と「あまりしたくない」が合わせて27.2%存在し、10人中3人は親と運動・スポーツを「したくない」と思っていることが明らかになった。

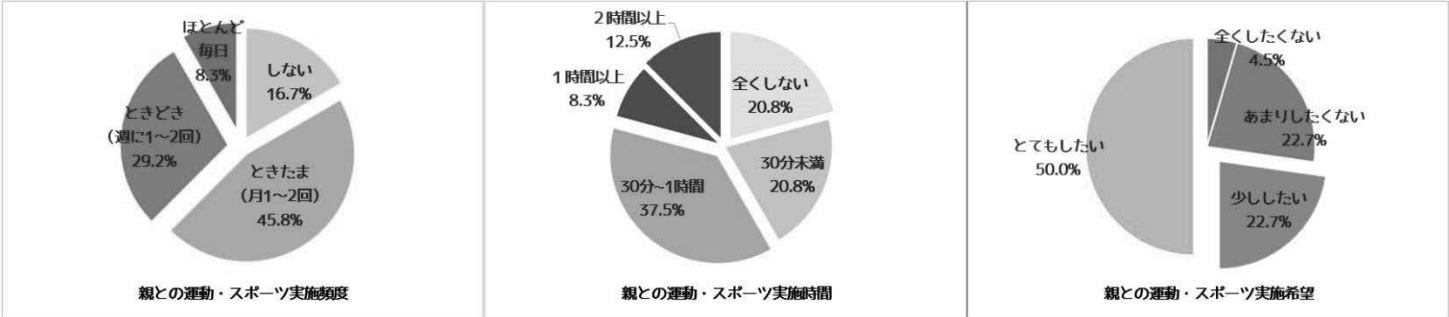


図 1. 日常的な親子スポーツ体験の実施状況および実施希望

2) 親子スポーツ体験の実施状況および実施希望の男女比較

高学年にもなると、性別によって親子スポーツ体験の実施状況や実施希望にちがいがみられるのではないかとこの仮説から、親子スポーツ体験の実施状況と実施希望について性別による比較を実施した。その結果、日常的な親子スポーツ体験の実施状況においても、実施希望においても、男女によるちがいをみることができ、特に実施希望においては有意な性差を観察し(5%水準)、男子生徒の方が親との運動・スポーツ実施を求めていることが明らかになった。

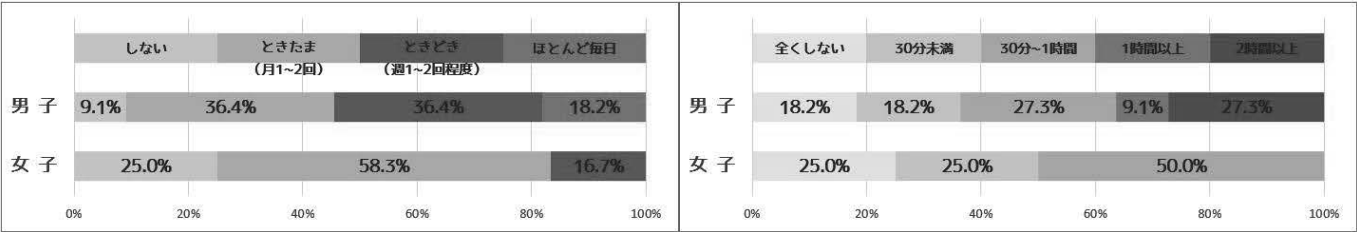


図 2. 男女別・日常的親子スポーツ体験の実施状況 (n.s.)

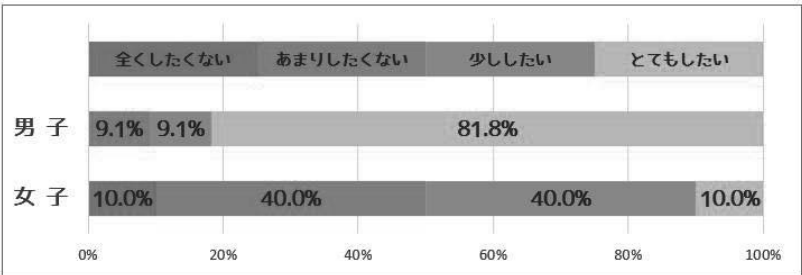


図 3. 男女別・親子スポーツ体験の実施希望 (p<.05)